

ゴーシュは初めはむしゃくしゃしていましたが、いつまでも続けてひいているうちに、フツと何だかこれは鳥の方が本当のドレミファにはまっているかしらという気がしてきました。どうもひけばひくほどカッコウの方がいいような気がしてくるのですでした。「えい、こんなバカなことしていたらオレは鳥になってしまうんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴたりとセ口をやめてしまいました。するとカッコウはどしんと頭をたたかれたようにフラフラっとして、それからまたさっきのように「カコツウ、カッコウ、カッ、カッ、カッ」と言ってやめました。それから恨めしそうにゴーシュを見て「なぜやめてしまうんですか。僕らなら、どんな意気地のないやつでものどから血が出るまでは叫ぶんですよ」と言いました。「何を生意気な鳥め。こんなばかなまねをいつまでもしてられるか。もう

出て行け。見ろ。もうすぐ夜があけるんじゃないか。」ゴーシュは窓を指さしました。東の空がぼうっと銀色になって、そこをまっ黒な雲が北の方へどんどん、どんどん走っています。「では、お日さまの出るまでお願いします。もう一回。あと少しですから。」カッコウはまた頭を下げました。「黙れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行け。もう